

論文の要旨

論文題目 現代日本語におけるオノマトペの意味拡張
— 「CVQCVri」型を対象にして—
氏名 陳 帥
学位 博士（文学）
授与年月日 平成27年3月25日

本稿は、「CVQCVri」型のオノマトペ「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」を多義語として捉え、多義語分析により、意味のネットワークを明らかにした。そして、共感覚比喩を再考し、オノマトペの意味拡張は、共感覚（2つの感覚による同時経験）が強固な基盤であることを主張し、共感覚比喩の制約と柔軟性について論じた。

第1章では、本稿の提起する問題点と目的について触れ、「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の5語を分析・記述の対象とした背景について述べた。

第2章では、先行研究の概観を通して、本稿の考察対象の位置付けを明らかにした。まず、オノマトペの定義と分類を確認したうえで、特に「CVQCVri」型のオノマトペの音韻・形態的特徴及び統語的特徴を取り上げ確認した。次に、オノマトペの多義性と共感覚比喩に関する先行研究を取り上げ、その問題点を指摘して本研究の課題を整理した。本稿では、共感覚を、「すっぱい匂い」のように、「ある感覚刺激を受けると同時に、異なる感覚刺激も受ける現象」と定義し、従来の言語学で言う共感覚比喩の中には、共感覚とは言えないものが含まれること、感覚間の転用ではあっても共感覚による転用と共感覚とは言えない転用の仕組みを解明する必要があることを述べた。

第3章では、本論文が依拠する認知言語学の経験基盤主義、百科事典的意味について確認した。経験基盤主義は Lakoff(1987)に基づき、百科事典的意味は 靱山(2010)に基づいて、その定義などを確認し、本稿の立場を示した。また、靱山(2001)に基づき多義語分析の4つの課題を示した。

第4章では、「こってり」と「あっさり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「こってり」に4つ、「あっさり」に5つの多義的別義を認め、両語とも五感内の味覚的経験を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、感覚内の意味転用に注目し、別義として確立した「こってり/あっさりした見た目」というような「味覚」から「視覚」への転用は共感覚に基づく転用であることを指摘した。最後に、「こってり」と「あっさり」の反義関係を確認し、それが両語の使用の基盤となっている経験の対立によるものであることを述べた。「こってり」は、「重い」の経験基盤と同じく「ものが動きにくい」という身体的経験に基づき、すぐに解

消されないものが「口の中」「目」「鼻」「肌」「耳」など五感の感覚器官、あるいは対象に「残る」と捉えられることを表した語であり、「あっさり」は、「こってり」と逆で、五感の感覚器官、あるいは対象に「残らない」と捉えられることを表した語であることを示した。

第5章では、「しっとり」「さっぱり」「すっきり」の意味を分析・記述し、意味のネットワークを明らかにした。まず、「しっとり」に5つ、「さっぱり」に8つ、「すっきり」に5つの多義的別義を認め、「しっとり」と「さっぱり」は五感内の「触覚」的経験、「すっきり」は「心理状態」を表す意味をプロトタイプの意味として認定した。そして、多義的別義間の相互関係を示し、各別義の定着度の違いも反映させて、すべての意味のネットワークを明示した。次に、五感内の転用に注目し、別義として確立した「しっとりした色」（触覚→視覚）、「しっとりした音」（触覚→聴覚）、「さっぱりした味」（触覚→味覚）、「さっぱりした見た目」（触覚→視覚）、「さっぱりした香り」（触覚→嗅覚）、「すっきりした味」（視覚→味覚）といったような転用は、共感覚に基づく転用であることを指摘した。最後に、「しっとり」、「さっぱり」、「すっきり」の使用の経験的基盤を明らかにした。「しっとり」は、「潤い」があると感じられると、心が癒され穏やかな気持ちになるという経験を基盤としていることを示した。「さっぱり」と「すっきり」については、五感で感じられる対象や生理的感覚がよい状態になると同時に、心理状態がよくなるという経験に基づいていることを述べた。

第6章では、第4章、第5章の分析を踏まえて、オノマトペの意味拡張を考察した。感覚以外の意味拡張と感覚内の転用に分け、感覚内の用法について共感覚比喩の観点からその基盤を再考し、さらに、「一方向性仮説」と武藤(2003)の修正案についても検討を加えた。感覚以外の意味拡張は、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーによる意味拡張が見られることを確認した。感覚内の転用においては、慣習的な用法の強固な基盤となっているのは共感覚であり、非慣習的な用法は、スキーマ化を通し、元感覚との類似性を基盤として使用されていることを確認した。本稿の考察対象において、感覚別の実例の多寡は、一般的に共感覚が成り立つか否かで説明が可能であることを確認した。その上で、共感覚比喩の強固な基盤は、共感覚に基づく比喩（メトニミー）であることを主張し、共感覚比喩の強固な基盤は、一般的に「同時経験」に基づいているため、われわれの感覚器官の機能に制約があることを述べた。ただし、われわれの持っている柔軟な認知能力により、類似性を見出すことが可能であるため、共感覚比喩には類似性を基盤とした転用もあると述べた。

一方、形容詞における共感覚比喩は、必ずしも共感覚がその強固な基盤であるとは言えないことを確認した。さらに、「同時経験」は必ずしも双方向的ではないことが確認でき、共感覚に方向性が存在する可能性は残っていることを述べた。最後に、武藤(2003)の修正案は、単に「食に関するオノマトペ」を対象にした考察結果であり、「食に関するオノマトペ」は、「触覚」と「味覚」「嗅覚」が未分化であることが関与するためであることを確認し、武藤

(2003)の修正案がすべての対象に適用できるか否かは検討の余地が残されていることを述べた。

以上のように、本稿は、「こってり」「あっさり」「しっとり」「さっぱり」「すっきり」という5つの「CVQCVri」型のオノマトペを考察対象とし、多義語分析を行い、その意味拡張を考察した。多義語分析により、オノマトペの意味のネットワークの階層構造を明示した。オノマトペの意味拡張の考察では、比喩の観点からは、一般語彙と同じように、メタファーやメトニミーを基盤として拡張していると説明できることを確認した。感覚内の転用については、共感覚の観点から再検討し、その強固な基盤となっているのが共感覚、つまり、複数の感覚での同時経験であることを述べた。